♪ MUSIC INTERVIEW

楽譜に書かれている音に どうやって命を与えていくか… それが楽器を弾く者の 役割であり、使命なんです

ヴァイオリニスト・小林美恵

インタビュアー・宮野陽子（東邦音楽大学教授／管弦打主任）

－宮野：美恵ちゃんと私は芸高から一緒でしたよね。私が1年先輩。天満敦子先生のところで初めて会った日のことは、今でもはっきり覚えています。

小林：そうでしたよね。私が中3の時で。家も近かったので、天満先生に見ていただくことになったんです。先生がご自宅にみんなを呼んでくださって一緒にご飯をいただいた時ですね。

－その頃からすごく可愛かったです。何かのコンクールでは、たまたま美恵ちゃんの近くに座って観てたことがあって……美恵ちゃん、楽譜を鞄から出してしっかり書き込んでました（笑）。

そうでしたっけ？その当時はコンクールで弾かない限り、演奏の機会がなかったですよね。

－確かに。学内で演奏するのは試験の時くらい。それ以外はほとんどなかったですね。

演奏会に出るためのオーディションが年に1回あるかなという感じで、他にはコンクールを受けるしかホールで弾くチャンスがなかった……今はいっぱいありますけどね。

－ロン＝ティボー国際コンクール・ヴァイオリン部門では日本人初の優勝でしたね。

そうですね。たまたまですけど。

－受けに行った時のことは覚えていますか？

昔すぎて（笑）……そうそう、このコンクールは期間中にホームステイをさせてもらえるんです。ホテルを選ぶこともちろんできますが、私はフランスの家庭ってどんな感じだろうって興味があったので、ホームステイを選びました。結局、最後まで残ったので、3軒のご家庭にお世話になりましたが、それぞれとても良くしていただいて、それが一番の思い出です。何にびっくりしたかというと、一言で言えば「自由さ」です。1軒目は奥様も旦那様も働いていらっしゃって、昼間は誰も家にいなくなるんです。「冷蔵庫に色々入ってるから自由に使って適当に作って食べて」と言われて（笑）。

－初対面なのに（笑）。

そう。だけど、逆にとてもリラックスできたんですよね。コンクールで弾くのは夜だったので、お勤め帰りに聴きに来てくださったりして。

－やっぱり、音楽がお好きな家庭なのね？

お好きでしたね。「こんなレコードもあるよ」「これ、いいと思わない？」とレコードをかけて下さったり、日本の自宅にいるようなリラックスした状態で過ごせました。

－フランスは3軒ともにそんな感じだったんでしょうか？

そうですね。どこも自由で。2軒目はお家にピアノがあって、私が賞をもらった後、ホームコンサートをしてくださいました。3軒目は、賞をいただくとひと月ほどいろんなところで演奏の機会があったので、その間引き受けてくださいました。それからは、私がフランスに行くたびに泊めてくださいました。本当にお世話になりましたね。

－ロン＝ティボーには審査員としても行ってらっしゃいますね。今でもコンクールの雰囲気は変わらないですか？

本選の会場は変わりましたが、ユニークなところは変わらないですね。私が審査した時は、審査員がヴォイオリニストだけではなくて、指揮者やピアニストもいらして、つまり、多様な面から審査するんですよね。

－ロン＝ティボーのコンクールってチャイコフスキーとかとはちょっと系統違うんですよね。そもそも、フランスって教育の仕方が違うんでしょうね。フランス音楽への興味は昔から？

フランスやフランス音楽への興味は子供の頃からありました。小学校で仲の良かった同級生の叔母さまがヴァイオリニストで、その頃パリに住んでいらして、たまに日本に帰国なさるとお会いして沢山お話しも聴けたので。でも実際にフランスの作品を弾き始めたのは、大学4年生の時ですね。それまではドイツの作品を主に弾いてきましたが、急にドビッシューのソナタにはまって……フランスに行きたい！フランス人と弾きたい！と思って、それで受けに行きました。公式ピアニストはフランス人なので、フランス人と演奏できると思って。

－ドビュッシーはヴァイオリン曲が殆どないですよね。

1曲しかありません。でも、あの曲は私にとっても大事な曲です。そして、ラヴェル、フォーレも……。

－影響を受けましたか？

はい。特にフォーレは今なお（笑）。今後も2番のソナタは弾き続けていきたいと思っています。

－今回の公開講座では、クライスラー、ティボー、エネスコを採り上げていますね。

フォーレ、ラヴェルのラインで見ていくと、エネスコは、なくてはならない人なんです。フォーレはラヴェルの先生で、ラヴェルとエネスコはコンセルヴァトワール（パリ国立高等音楽院）の同期生で、ラヴェルが作った曲をエネスコが弾いているんです。ラヴェルがピアノを弾いてエネスコが初演してるって素晴らしいですよね？それで私はエネスコにも興味を持ちまして。エネスコもヴァイオリニストでありながらたくさん作曲してるんです。実は今、Hakuju Hallでヴァイオリンの魅力を色々な方面からお伝えしようというコンサート・シリーズをしているのですが（『小林美恵 華麗なるヴァイオリンの伝説 第6回最終回「宵ひ待ち草が見た夢」小林美恵 東欧&アジアを弾く』2021/10/31(日)開演14:00 Hakuju Hall）、この講座の後の10月末に最終回を迎えます。そこでエネスコのソナタも取り上げます。最近では演奏される機会も少しずつ増えてきましたが、その良さを知っていただきたいとずっと思っていました。そして、ティボーもエネスコと同期なんです。私もロン＝ティボーで賞をいただいてますから、やはり特別な存在なのです。で、ちょっと調べましたら、クライスラーはこの2人よりも少し年上ですが、やはりパリ国立高等音楽院で勉強しています。後に、この3人にイザイも加わって、ティボーのお家に、毎夏集まって、公開の演奏会ではなく、自分たちの楽しみのために室内楽をしたそうです。イザイもヴァイオリニストで作曲家で優れた教師でもあり、クライスラーやティボー、エネスコに無伴奏ソナタを書いています。

－毎年夏に、4人の偉大な芸術家が集まっていたなんて。凄いですね。

クライスラーもヴァイオリンの曲をたくさん書いてます。ヴァイオリニストが社会とどう結びついて、その役割をどうやってこなしていたんだろう、ということに私はとても興味を持ちまして……今ヴァイオリンと社会とはあまり結びついていない気がするので。どのように彼らはヴァイオリンの将来を考えていたのだろう、どう発展させたかったのだろう、というのが知りたい。それから100年近く経ちましたが、現代の私たちにとっても興味深いことです。

－確かに。社会との繋がりがなければ発展できない。現代ではその役割も変わってきているでしょうね。

次世代にどうつなげていくんだろう……そこのところを考えたい。最初のきっかけはエネスコのソナタだったのですが、この講座ではヴァイオリンと社会についても、みんなで考えたいと思いました。

－それはものすごく興味深いテーマですね。楽しみです。では最後に、本学園の学生・生徒にメッセージをお願いいたします。

大学生の若さがうらやましいです（笑）。若さならではの柔軟性や吸収力を存分に活かして、積極的にチャレンジをして欲しいと思います。

－ヴォイオリンに携わっていく若い人たちには何を伝えたいですか？

一番言ってるのは、「自分の音を注意深く聴く」ということですね。自分の出している音が自分が本当に望んでいる音なのか。そして、望んでいる音を出すには、その曲の仕組みや歴史を含め、いろんな方面から勉強しなくてはいけない。あとは、作曲家が書いた音にどうやって命を与えていくのか。それが楽器を弾く者の役割であり、使命なので。そういう意識をもってもらいたいなと思っています。

ヴァイオリニスト

小林 美恵（こばやし みえ）

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学を首席で卒業。在学中に安宅賞、福島賞を受賞。1990 年、ロン＝ティボー国際コンクール・ヴァイオリン部門で日本人として初めて優勝。以来、国内外で日本を代表するヴァイオリニストとして活躍。これまでに、国内の主要オーケストラ、ハンガリー国立交響楽団、プラハ交響楽団のソリストとして、充実した演奏を高く評価された。2015 年のデビュー 25 周年は 2 年間で 6 回の記念リサイタルを企画・好演。2018 年から Hakuju Hall にてヴァイオリンの魅力に迫る全 6 回のリサイタルシリーズを行っている。CD は「J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ & パルティータ（全曲）」等多数リリース。現在、昭和音楽大学客員教授。

東邦音楽大学教授 宮野 陽子（みやの ようこ）

東京芸術大学附属音楽高校、東京芸術大学音楽学部卒業。在学中、安宅賞を受賞し、芸大オーケストラと共演。1988 年、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団の第 1 ヴァイオリン奏者として渡欧。オランダ在住中、オランダ・アルクマール音楽祭に参加。室内オーケストラ、室内楽などの活動も行う。1996 年帰国。ソロ・室内楽を中心に演奏活動を行っている。東邦音楽大学・短期大学教授。